

エリザベス・バダンテール著
『女性であることと母親であることの葛藤』

上村 くにこ

1 目に見えないイデオロギー「戦争」が始まっている。



二〇一〇年二月、エリザベス・バダンテールの『女性であることと母親であることの葛藤』(1)という本が出版された。タイトルだけみると、三〇年まえのフェミニズム運動高揚のなかで、「生殖決定権を女性に！」という、かつてはとても熱かった、しかし今は少し時代遅れになった感のある主張を思い起こさせる。

しかし本書を読むと、やっと市民権を得たかみえるこの権利が、新しいイデオロギーの台頭によって危機にさらされているということを主張するために、わざと古臭いタイトルを選んでいるのだということがわかる。この新しいイデオロギーが、

血の滲む努力によってフェミニズムが積み上げてきた女性の権利と自由に「戦争」をしかけ、じりじりと「後退」させつつあるという。この書はそれを糾弾するものであるから、良くも悪くも論争的で、それゆえ読みやすい。

さてこの「戦争」を仕掛けて女性の権利と自由を侵害しようとしているのは誰か？ それは一見味方のような顔をしている三者である。まずは「自然に任せ」と主張するエコロジスト、次に極端なアメリカの本質主義フェミニストたち(2)、最後に小児科医を中心とする医学界、動物行動学、霊長類学、進化心理学、社会生物学などの科学者である。「母なる自然」の旗印のもとに、またぞろ「母親本能」を持ち出し、母親の献身を謳い上げて女性たちの罪悪感をかきたて、女性を母親という役割だけに押しとどめるイデオロギーである。

2 フランス構築主義フェミニズムの代表者

バダンテールは、「ポーポワールの娘」と自らを定義しているように、男女差は社会的な構造から帰結するもので、生物的な男女差はきわめて少ないと主張する構築主義を代表するフランスのフェミニストである。一九八〇年に出版した『母性という神話』(3)のなかで、歴史的事実をふんだんに挙げながら、「母性本能」というものはない。社会環境によって母親は母性愛

を持てたり、持てなかつたりする」と主張した。母性を否定するのはけしからぬという反発と、「よき母親であれ」というプレッシャーに苦しんでいた女性たちの歓迎の声とが渦巻いて、出版当時は世界的に話題の書となった。バダンテールがあげた歴史的事実の不十分さにくつかの批判がなされたが、「母性に本能というものはない」という主張は、ある程度定着した感があった。さらに一九八六年に書かれた『男は女・女は男』⁽⁴⁾という本の中で、これから男女は無限に両性具有的になってゆき、子供を育てる喜びを体験する「めんどりパパ」と呼ばれる男性たちが増えていることを指摘し、さらに子供を産みたいという願望は男性にもあると主張した。「男女を分ける唯一の違いは、女には子供を産む可能性があり、いまのところ男には子供を産むことができないことだけだ」。

男女を分ける溝はたしかに浅くなってきてはいる。しかしこの三〇年を見ると、この予想に大きな障害が現れたと言わざるを得ないと彼女は言う。「母親」であることと、「女性」であることの両方を生きることが、相変わらず困難である。フェミニズムは影響力を失い、母親になることこそ女性の最高の喜びであるという考えがひそかに蔓延しつつある。本書の目的は、この新しいイデオロギーを明確に分析することである。

3 エコロジ思想はなぜ女性の権利を侵害するのか？

エコロジ思想は女性が「自然を尊重し、自然を体現する母」になることを要請する。たとえば一部のエコロジストは、化学によって人工的に作られたものは、人間の体に悪いからすべて避けるべきだと告発する。ピルは癌やホルモン異常を誘発し、肥満、偏頭痛、不妊等を誘導する恐れがあるから、避けた方がいいというスローガンが影響力を持ちつつある。フランスではピルの売れ行きが二〇〇三年から二〇〇六年の間に、六五〇〇万から五三〇〇万にまで減った。ピルはたしかに全く無害ではないだろうが、副作用を最小限にとどめる薬が開発されつつある。まったく副作用のない薬は存在しないのだから、ピルが自然から生まれたものではないことを理由に、ピルの選択を否定するのは、女性の生殖の選択を狭めるものであるとバダンテールは主張する。

また一部のエコロジストたちは自然分娩の苦しみを賛美し、おしゃぶりや哺乳瓶には有害な化学物質が入っているから使わないようにせよという。人工的なものはすべて避けよという極端なきめつけは、女性の育児の負担をいたずらに増やすだけだ。また紙おむつも森を破壊するから、洗えるおむつを使うように勧める。現フランス環境省大臣は「使い捨てのおむつは環境破

懐税をかけるべきだ」と提案した。もし政治家が子育てを支援したいのなら、「環境にやさしい使い捨てのおむつ」を開発することを最優先する政策をとるのが本筋ではないだろうかとバダンテールは言う。

4 「母と子の絆（ボンディング）」理論

ポウルビイの進化心理学をさがげとし、クラウス、ケネルによって実証されたとして世界的に認められるようになった「母と子の絆（ボンディング）」理論にも、バダンテールは厳しい批判の目を向ける。愛着理論とも呼ばれるこの学説によれば、乳幼児が母親を「自分を愛し世話をしてくれるもの」という安心感を持ってなくなることを「母性剥奪」とよび、子供の人格形成や精神衛生に問題が生じるといふ。ポウルビイは「安心を与える者」を母親とは限定せず、母親代わりになるものがいれば、乳幼児は安全感を得ることができるとしている。しかしそこからクラウス、ケネルなどは「生まれてすぐの赤子の授乳による肌と肌の接触は、母性愛を刺激し『新しい母親』になるために決定的に重要な時間である」という結論をひきだす。さらに「出産直後の愛着関係の不成立が親子虐待の原因である」とまで断定する小児科医もいる。出産で疲れているからというようないらぬ配慮によって、出産直後に産室から母子を引き離して、

最初の食糧として、ジャンクフードともいえる粉ミルクを乳幼児に与えるのはもつてのほかで、授乳を通じて「絶対の安全に包みこまれた母子の相互関係」を打ち立てるように配慮することが大切であるという。なぜならこの関係が子供の知能や情緒発達のカギを握っているからである。もしこのボンディングがうまくゆかなければ、子供は学校へ行っても問題を起こし、キレやすく耐性のない子供に育つとまで断定する。出産直後の授乳が、学齢にいたるまでの母子関係や子供の生活習慣にどんな影響を与えるかの実証研究は、それほど進んでいない。それなのにマスコミや病院は、この学説を金科玉条のごとくに受け入れているとバダンテールは批判する。

5 「人間はチンパンジーではない」

さらに七〇年代から目覚ましい台頭を見た動物行動学や霊長類研究の成果も、新しいイデオロギーの形成に力があつたとする。哺乳類の身体には、出産と授乳をきっかけとしてオキシトシンとプロラクチンというホルモンが分泌するような仕組みができていく。このホルモンのおかげで、哺乳類のメスはどんなことがあっても子供を捨てず、子育てを優先する行動をとることがわかってきた。人間も哺乳動物であるからには、この「本能」のおもむくままに任せれば、母親はうまく子育てができる

はずだという言説がそこから導き出される。動物は子育てをうまくできるのに、人間だけが子育てに問題を抱えているのは、「本能」が文明によって壊されているからだという結論になる。しかしこのホルモンは男性にも分泌され、その働きは育児行為だけでなく、人間の信頼感を強めたり、信頼に応える行為を強めるなど多岐に渡っており、その分泌調整もまだ解明されていない。このホルモンを人間の「母性本能」の決め手とすることには無理があるとバダンテールは指摘する。

「なぜ母親は子供を殺すか」というテーマで研究を続けたアメリカの霊長類学者であるサラ・ブラッファマー・ハーディは、「母性本能」という言葉の使い方は、男性中心社会に利するものだとしながら、オキシトシンによって引き出される授乳の「歓喜」が子供への愛を引き出す過程は、人間の場合もたいへん重要であると主張している⁽⁵⁾。それに対してバダンテールは、彼女が唱える「母なる自然への讃歌」はすべての女性に当てはまるわけではなく、育児法は無限にあるはずなのに、その選択肢を狭めることになるかと反論する。「自分が哺乳類であることを実感する女性もいれば、それは絶対いやだと思う女性もいる」というスタンスが望ましいとバダンテールは主張する。

6 「子供の幸福は母親にかかっている」

バダンテールが最も力を入れて厳しく批判するのは、アメリカを中心に発展し、ヨーロッパにも影響力をふるっている「ラ・レーチエ・リーグ（母乳連盟LLL）」である（以下LLLと省略する）。この組織は一九五六年に、授乳に悩むシカゴ郊外の七人の母親たちの相互助け合いのなかで生まれたヴォランティア組織である。このころアメリカでは粉ミルクで育てるのがよいという考え方が圧倒的であり、母乳で育てたいという母親は二七%しかいなかった。やがてこの組織はどんどん影響力を増して世界中に拡がり、今や七〇カ国に支部をもつ国際組織（国際母乳連盟、以下LLLと省略する）となった。



2009年フランスにおける「母乳祭り」の光景

このNPO組織のどこが女性の自由を削ぐものなのか？ 一九八五年にLLLのIが発表した二〇カ条の「哲学」をバダンテールが引用しているが、その中で私が重要と判断したものをかいつまんで紹介してみよ

う。

- ・ 母乳は新生児の健康に最も良いものである。
- ・ 母乳は自然で子供の成長に最も良いものがある。
- ・ だから生まれてから六ヶ月は母乳だけで育てるべきである。
- ・ その後も子供が求めなくなるまで、授乳は続けるべきである。
- ・ 産まれた瞬間から、母親はいつも赤子のそばにいて、完全授乳するべきである。
- ・ 父親の役目は母子に愛を注ぎ、授乳を援助することである。面白いのは、この「哲学」はそれぞれの国の事情に合わせて異なっていることである。たとえばフランスのLLLには「母親は時計を捨てよ」とか、「母が休んでいるあいだ、父が家事をするように」という条項がある。日本のLLLには、病院や施設が目指すべき一〇カ条はあるが、そもそも母親が目指すべき「哲学」というものは謳われていない。
- ・ 最も過激なのはイギリスのLLLが出しているヴァージョンで、バダンテールは「粉ミルクに対する母乳の宣戦布告状」のようなものだとは批判する。
- ・ 粉ミルクやおしゃぶりのような人工的なものは家に持ち込むな。
- ・ 自分の都合にあわせて授乳するな。
- ・ 授乳の技術は本では学べないから、妊娠後期からLLLの

会合に出席するのがいい。

- ・ 授乳に反対する意見には耳を傾けるな。たとえそれが母親や姑でも。
- ・ 公共の場で授乳するのに異を唱える人がいれば、沈黙せず教育の機会と判断せよ。

もしこの教えをきちんと守ろうとすると、女性が外で働くことは難しくなるだろう。託児所にもベビーシッターにも、母親や姑に預けることも避けなければならなくなる。ウイルスに対する免疫力がまだない新生児を託児所に預ければ、感染病にかかる危険性は家で育てるよりもずっと高い。

フランスの小児科医にして国会議員であるアンティエ博士が書いた本は、次のように結ばれている。「赤子をあまりに早く母親から引き離すことは、子供をいけにえに差し出すのと同じである(6)」。この決めつけを読めば、どんな母親も硫酸を浴びるような罪悪感を感じるだろうとバダンテールは言う。

さらにバダンテールが強調するのは、LLLが政治力を発揮して、医学界と深く結びつき、イデオロギー的影響力を増していることである。一九八一年にはUNICEFとWHOの双方と連携することに成功した。UNICEFはLLLが掲げる一〇カ条を実行する産院を「赤ちゃんにやさしい病院」として認定するようになった。「六ヶ月までは完授乳で、二歳になるまでは母乳を飲ませ続けること」というわかりやすい目標を掲

げ、「子供に一番良い」という医学界のお墨付きを得て、このキャンペーンは驚くべき影響力で世界中に拡がっている。本家のアメリカでは授乳する母親は一九八一年には二四％だったのが、二〇〇二年には七〇％にまで昇った。

LLLは二〇一〇年には七五％にまで上げる目標を掲げている。一方ヨーロッパを見ると、国によって普及率に大きな差が出ている。たとえばフランスでは二〇〇二年に新生児に授乳する割合は五〇％をわずかに超える程度なのに、ノルウェーやスウェーデンなどのスカンジナビア諸国は九五％から九九％の普及率であった。「赤ちゃんにやさしい病院」と認定される病院の数も、フランスでは二〇〇七年に三施設と異常に少ない(7)。この遅れを取り戻そうと、フランスのLLLや一部の産院の口調が、だんだん「授乳は母親の権利である」というより「母親の義務である」という強制に変ってきていることをバダンテールは心配する(8)。

またWHOは一九八一年に「母乳代用品」つまり粉ミルクの宣伝を規制し、試供品を渡すことや、低価格で売ること、元氣そうな赤ちゃんの写真やイラストを製品のラベルに貼ること等を禁止し、粉ミルクを売るときには、必ず母乳育児の利点と人工育児のマイナス面を説明しなければならないという国際基準を提案し、採択された(9)。

7 父親は母子の「保護者」である。

子を産み育てる大切さを説く言説が、「女性の権利」ではなく「女性の義務」として強調される危険性をバダンテールは繰り返し強調する。やっと「家父長制」という重荷を取り払ったかと思ったら、こんどは「子供」がなによりも優先される。子育ての主役は母親なのだから、父親は母親に場を譲らねばならない。家に母親は二人もいらぬ。乳幼児を熱心に世話する「めんどりパパ」は「こっけいな存在」でしかない。では父親の役割とはなにか？ LLLは言う。「父親は母親が完全授乳できるようにサポートし、職場よりも家庭を優先し、母親にかわって家事をこなさねばならない」。父親の役割は、子育ては母親に任せてそれ以外の家事と仕事を受け持つことである。さきほどのアンティエ博士は言う。「理想の父親の役割は母を守ることであり、パートナーを女として母として崇めることである。理想の父親は授乳に専念する母親に替って家事いっさいを引き受けるうえに、母親に敬意と愛を示すために花束を贈る(10)」。家事いっさいを引き受けたうえに、かつてのレディーファーストを実行する男らしい男も演じなければならぬ。いったいそんなことが今の社会で実現可能だろうかとかバダンテールは疑問を呈する。

バダンテールが要求する母性尊重と男女平等が両立するような社会の仕組みに一番近い国はスウェーデンであろう。給与の八〇%が両親手当で保障されている育児休暇三九〇日のうち、父にも母にもそれぞれ六〇日に割り当てがあり、残りはお互らかに譲りあえる。こうして見ると、スウェーデンは理想の国のように見える。しかしバダンテールはこの政策をもつてしても、両性の平等よりも母性の保護のほうに重点が傾いていると指摘する。この国の七五%の父親が六〇日の育児休暇を取る。しかしそれ以上の育児休暇をとる父親はまだ一七%にすぎない。男女の賃金格差はまだ激しく、一定レベル以上の賃金を八〇%の男性が獲得しているのに対して、八〇%の女性が水準以下の賃金で働いている。この賃金差は、それほど厳しい労働を求められないが、賃金の安い公共の職場で女性が働いているのに対して、男性は厳しい労働を求められるが賃金の高い企業で働いていることに由来する。企業は育児休暇をとる可能性の高い女性は採りたがらないのである。スウェーデンでは女性が幹部に昇進する率は一〇%にすぎない。「ガラスの天井」はまだイギリス並みに厚いと言わねばならない。現在のところ、どんな家族政策も、男女平等を実現するためには有効に働いていないとバダンテールは結論づける。

8 「母胎のストライキ」

これまで見てきたように、今日の女性はこれまでになく重い責任を負わされている。子供の身体の健康だけでなく、心理的な安定、知的発展、社会適応、安全の保証にまで気を配らねばならない。母親業は働きながらできる仕事ではないというプレッシャーがどんどんきつくなっている。母親になる女性は三つの矛盾を抱え込んでいる。まず仕事か子供かという葛藤。社会は「有能なキャリアウーマンであれ」と言いながら、また同時に「よき母であれ」というダブルバインドをかけている。また「カップルで生きる」と「子供の世話に専念する」という葛藤も抱え込まねばならない。しかし一番大きな葛藤は「献身的母親になること」と「生きがい」がかみ合わないという葛藤である。子育てのために自分の一番したいことを諦めなければならぬのかという葛藤である。「授乳は母の義務」というイデオロギーのせいで、女性の人生は「積荷過剰」になるとバダンテールは指摘する。

当然このような矛盾に直面して、「子供を産むのを先延ばしにする」、「子供をつくらない」という選択をする女性も出てくる。バダンテールはこの傾向を「母胎のストライキ」と名付けて、最近の重要な選択の一つとして分析している。

欧米ではこの十数年来、出生率が少しづつ増えてきた国が多いが、そのなかでドイツとイタリアだけは例外的に出生率が上がらない。バダンテールはこの二国の他に、出生率の低い代表的な国として日本をあげ、この三国の小子化を分析する。二〇〇五年にドイツでは一・三四%、イタリアでは一・三三%、日本では一・二六%であった⁽¹¹⁾。この三国は家父長制の伝統がまだ強く残っており、「女である」意味は何よりも「母である」ことであるという考え方がまだ根強く残っているところで、ドイツの「ムッター」、イタリアの「マンマ」そして日本の「かあさん」と言えば、子のためには身を粉にして働き、家庭に絶大な力を発揮する存在でもあるという共通点を持つ。七〇年代から仕事を求める高学歴の女性が増えてきたが、三国ともにそうした女性の育児を援助する政策を進めてこなかった。託児所に子供を入れる余地は極めて少なく、子供よりも仕事を優先するのは母親としてあるまじき行為であるという無言のプレッシャーもきつかった。そのような状況下で女性たちが「子供を産まない」という選択をするのは当然のなりゆきと言えるだろう。英語では *childless* (子供なし) と *childfree* (意図的に子供なしを選択すること) を区別するが、日本でもその狭間をゆれつつ、結局子供を持たない選択をする女性が増えている。バダンテールは日本の女性が、女性の抑圧に対する一つの抗議として、子供を産まない選択をしていると分析している⁽¹²⁾。ドイ

ツでは、イタリアや日本に比べて「母は偉大である」という強い規範は消滅しつつあるが、それでも「母胎のストライキ」をする女性が多い。その原因として、手厚い児童手当は父親の給料に加算される、育児休暇手当は非常に低い、託児所や幼稚園も不足している等の悪条件が原因として挙げられている。ドイツの特徴は、高学歴になればなるほど、子供を産まない選択をする女性が増えるということである⁽¹³⁾。ドイツ女性を対象に「あなたの人生にとって一番大切なものはなにか」というアンケート調査を一九九九年に行った。それによると二一歳から五〇歳までのドイツ女性が選んだのはまず「健康」、次に「収入の安定」、「仕事」、「パートナー」、「生活条件の良さ」と続いて、「子供」はやっと六番目に選ばれたという。このように女性の「生きがい」は多様化している。出産率の低下は、子供を産み育てることが、これほど過重なプレッシャーになっていることに対する抗議として受け止めることができる。バダンテールは結論づける。

9 悪い母だからこそ子育てがうまい？

それに対してフランスでは出生率が二〇〇六年には二・〇〇%まで上昇した。いまや欧州でトップの出生率である。それはなぜなのか？ さまざまな要因が指摘されているが、バダンテール

ルによれば、決定的な要因を指摘することは難しく、まさに「ガリアの謎」としか言えないが、一つだけ確実に言えることがあるという。それは出生率に関係なく、フランス女性が自らの選択によって子供を産んでいるということである。

フランスの母は「悪い母」として一八世紀の昔からずっと評判が悪かった。子供に授乳することに熱心でなく、一八世紀には乳母に、そして二二世紀になっても託児所やベビーシッターにあずけて平気である。二〇世紀初頭の人類学者マリノフスキーなどはフランスの母親の態度を「由々しき錯乱」とまで呼んだものだ。フランスの伝統として、母親であるよりは女性として人生を楽しみ、社会的に成功する方を重要視する伝統が最後まで続いている。「よき母親であれ」というプレッシャーは他国に比べて少ない。それに加えて託児所、ベビーシッターなど多様な託児施設が充実している。両親のうちどちらかが、子供が三歳になるまでのあいだに六カ月休暇を取ることが可能で、企業は休暇前と同じ身分と給与条件を保証する義務がある。このように女性に選択の自由を与える政策がとられている。いまのところフランス女性には、一部の医師やLILの影響力をはねのけて、「自分の一番したいことを追求する個人主義」をかるうじて守っている。しかし「いつまで続くのか？」という警告でこの書は終わっている。

10 「赤ん坊は男性支配の同盟者である」か？

バダンテールは二〇一〇年二月一日付の『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』のインタヴューの中で、「赤ん坊は男性支配の同盟者である」と言い切っている。論争のための挑戦的言い回しであると言いついては、私にはこの断言にバダンテールの限界がはつきり見えているように思えてならない。「赤ん坊」か「男女平等」か、「産むことの拒否」か「家に帰る」か、「エコロジー」か「女性の自由」か、「授乳」か「自由」か、という二項対立の構図を持ち続ける限り、フェミニズムの未来はないと思うからだ。

バダンテールの指摘には正しいところがたくさんある。現状では「自然の母に帰れ」というイデオロギーは、女性の負担を重くするだけであるというところは確かである。労働市場に身をさらしながら、「自然の母」になることは今のところ無理であるから、どちらかを選ばなければならない状況にあることも事実である。二〇一〇年八月一九日付の『ル・モンド』紙によれば、フランスでもいまだに男女同一賃金の実現は困難で、一〇人以上の雇用者がいる企業においては二七％の差がある（二〇〇八年度）。また子供のいない女性のうち九〇％は働いているが、子供が増えるにつれて働くのをやめ、子供が三人いる女性

で働いているのは四三%である(二〇〇八年度)。しかも家事負担の八〇%を女性が担っている現状は二〇年来変わっていない。フランスの緑の党の女性書記長デュフロが「使い捨てのおむつをやめて、男性がおむつを洗えばよい」と発言したが、これは今のところ新しい役割分担の夢物語にすぎない。科学とエコロジーの名において新しく台頭した「自然の母イデオロギー」が、現状では女性の自由と平等を圧迫するものになる危険性があるという告発はおおいに意味がある。その最大の意味は「完璧な母親でなければ子供は育てられない」というプレッシャーから女性を解放し、「子育てのやり方は自分で選んでよいのだ」という開放感を与えることであろう。

しかし結局のところ、バダンテールは女性の権利と自由を侵害するものの正体を見間違っているのではないかと思う。敵はエコロジーでも授乳でもない。「授乳するフェミニスト」や「エコを徹底実践するフェミニスト」がいてもいい。授乳やエコロジーがフェミニズムと両立しないと決めつけることは男女平等の未来にとって建設的でない。問題は労働市場で男女差別を維持することに利益を見出す資本主義システムであり、医学という権威のもとに「自然の母」であれと強要するイデオロギーである。六〇年代には同じ権威が「粉ミルクで育てるのが一番よい」と教えていたことを思いだす必要がある。「仕事」も「いきがい」も「子供」もどれもほしいというのが、現代女性

の一般的願ひであろう。それを阻んでいる源はいったい何なのか、見えにくくなっている。バダンテールはそれについて考えるきっかけを与えてくれていることは確かであるが、敵を見誤っているのではないだろうか。エコロジーの生活や授乳を含めての、女性の選択の可能性を保証する方向をさぐることが大切であると思う。

註

- (1) 原題は *Le conflit/ femme et la mère* である。出版元は Flammarion 社、二〇一〇年二月に出版された。
- (2) アメリカの本質主義フェミニズムについて、バダンテールは二〇〇三年に Odile Jacob 社から出版された *Fausse Route* というタイトルの本のなかで十分批判しているので、本書では批判は省略されている(日本語訳『迷走するフェミニズム——これでいいのかわりと女』、夏目幸子、二〇〇六年、新曜社)。
- (3) *L'Amour en plus*, Flammarion, 1980. 日本語訳『母親という神話』、鈴木晶訳、ちくま文芸文庫、一九九八年。
- (4) *L'un est l'autre*, Odile Jacob, 1986. 日本語訳『男は女・女は男』、上村くに、響庭千代子訳、筑摩書房、一九九二年。
- (5) Sarah Blaffer Hrdy, *Les Instincts maternels*, Payot, 2002, P. 605-608.
- (6) Edwige Antier, *Une l'éducation 1*, Robert Laffont, 2002, P. 13.
- (7) 日本では二〇〇八年度で五六施設を数える。

- (8) 本書が出版されてから四ヵ月後の六月一九日付の『ル・モンド・マガジン』によると、二〇一〇年にはフランスで新生児に授乳する母親の割合は七〇%にまで昇っている。また健康と摂食政策の一環として、政府は「授乳は産まれてから少なくとも四ヵ月は続ける」目標を掲げると発表した。バダンテールの心配が実際のものになっていくといえよう。
- (9) 一九八カ国のうち、アメリカだけが「表現の自由」を理由に反対した。日本はアメリカに追従するかたちで棄権した。
- (10) Edwige Antier, *Vive l'éducation!*, op. cit., P. 44-45.
- (11) 二〇〇九年にはイタリア、日本、ドイツともに一・三七%となった。
- (12) 戦後日本の女性たちの「母性離れ」については、「母胎のストライキ」という視点だけでなく、もっと複雑な文化分析が必要であろう。
- (13) メルケル首相の指揮のもとに二〇〇七年からスウェーデンをモデルに新しい育児休暇制度が導入されたが、二〇〇九年までのところ出生率は一・三七%と横ばいに留まっている。

(う え む ら く に こ) 神話論・ジェンダー論